



作家
楠木
新さん

Profileプロフィール

1954年神戸市生まれ。京都大学法学部卒業後、生命保険会社に入社。人事・労務関係を中心に、経営企画、支社長等を経験。勤務と並行して、「働く意味」「個人と組織の関係」をテーマに取材、執筆活動を続ける。2015年定年退職。

2017年の『定年後』(中公新書)は、24万部を超えるヒットに。他の著書に『人事部は見てる。』(日経プレミア)、『動かないオジサンの給料はなぜ高いのか』(新潮新書)、『左遷論』(中公新書)など。

—— 著書の「定年後」(中公新書)は24万部を超えるベストセラーになりました。

実は今回の「定年後」は当たるんじゃないかと思っていたんです(笑)。

私は生命保険会社に勤めながら執筆に取り組み、「会社で働く意

味」や「社員と組織の関係」などをテーマに書いてきました。その中で定年になった先輩に退職後の過ごし方にとまどっている人が多いことに気づきました。「定年」というテーマは間違いなくニーズがあると思いました。

そこで60歳で定年退職して、地域の図書館やスポーツクラブ、ショッピングセンターを廻り、梅田のコンコースで定年退職者と思しき人を探したり、喫茶店、百貨店、映画館、書店、銀行、カルチャーセンター、スーパー銭湯などに足を運び、退職した人がどこに行っているのかを私なりに徹底的に取材しました。

—— 60歳から75歳を「黄金の15年」と呼んでいます。これをどう過ごすかのヒントは？

60歳の定年から75歳位までは家族の扶養義務も軽くなり、身体も元気で自立した活動ができて、あまり諸事にも煩わされない。しかも時間はたっぷりあります。この期間をイキイキと過ごしている人もいれば、多くの時間の中で何をしたいのか分からず立ち往生してしまう人もいます。この差はとても大きい。この「黄金の15年」をどのように過ごすのが「人生後半戦の勝負」だと思ったのです。

取材の中で、とにかく主体性をもつことが一番大切だと感じました。スポーツや趣味、ボランティア、小説を書くなど何でもいいので自分に合ったことを思い切ってやってみるといいでしょうね。例えば、小さい頃好きだったことやコンプレックスを持っていたこと



にもう一度取り組んでみる人もいます。話を聞いていて、定年後の自分を助けるのは「子どもの頃の自分」だと感じました。同窓会などを見直してみるのもいいかもしれません。

—— 大手企業で働いていたときに執筆をはじめたきっかけは？

一つは40歳の時の阪神・淡路大震災です。私は神戸市兵庫区の新開地近くで育ちました。当時住んでいた宝塚も実家のある灘区も新開地も景色が一変しました。それまでは順調な会社生活を送っていたのですが、「このまま会社で働くことでいいのか？」といった疑問が湧いてきました。そして47歳の時に転職を契機に体調を崩して会社を休職しました。50歳の時には体調は完全に戻ったのですが、平社員になったので今後どのようにしてよいのか分からなくなりました。自分がいかに会社にぶら下がっていたかを思い知らされました。

その頃に新聞紙面で、50代で会社員から転身して、自分の思いを遂げるために小さな会社を立ち上げた人の記事に出会いました。紹介された人の「いい顔」がとても印象に残りました。

それで自分の今後の生き方や働き方への答えを求めてインタビューをはじめました。当初は執筆のための取材というわけではなかったのです。神戸製鋼の社員からそば打ち職人に、NHK記者から落語家に、ゼネコンの会社員から社会保険労務士の資格を取って独立した人など、会社員から転身した人



たちに取材しました。いくつかの偶然も重なって朝日新聞beの土曜版に「こころの定年」という連載コラムを持ったのが執筆活動のはじめです。

—— いきなり取材をしたり執筆をするというのは大変ではなかったですか。

50歳でゼロから執筆をはじめましたが、インタビューの対象者が、元々同じ会社員、しかも悩みながら次のステップに移行した人が多かったのも、自らのことを主張したい人が多かった。どんどん話をしてくれました。中学からの友人は私のことを「人から話を聞いて、

それにちょっと色をつけて他の人に伝えて喜んでもらうのが得意だった」と評してくれたことがあります。執筆はある程度向いていたのかもしれませんが。

また保険会社にいたからかもしれませんが、出版社への売り込みや編集者との人間関係作りはうまい方かもしれません。営業力はあるみたいです。

これは全く余談ですが、生命保険会社に勤めていた時に大阪弁護士協同組合さんを担当していた時期があって、今も当時お世話になった方がおられます。

—— いろんな人をインタビューする

ことで何が見えてきましたか。

多くの個人的な体験を通して物事を考えることも意味があって、書籍や理論とは違った意味での知見を得ることができるような気がします。

例えば自分に近い人のアドバイスやたどった道筋が役に立ちますね。手の届く魅力ある人の道筋を具体的に聞いて行くことが大事だと思っています。人は頭ではいろいろな矛盾することも言いますが、実際に歩く道筋は大体似たものになってきます。いきなりジャンプはできないものです。それを繰り返すと自分の今後の道筋も見えやすくなります。

また一人一人はそれぞれ異なっているので、できるだけ多くの先達に話を聞いて、それらを重ね合わせると全体感が手に入ります。先ほどの転身者は総勢150人くらいに話を聞きました。

—— **ところで弁護士には定年がありません。弁護士の「定年」に関してアドバイスがあれば教えていただけますか。**

私は会社員の定年ばかり見てきましたが、定年のない弁護士先生が自分で引退時期を決めるのはかえって難しいかもしれないですね。引退するかどうかよりも「もう一人の自分」を育てることが良いかもしれません。

仕事以外で、自分に合ったこと、「いい顔」になれることに注力してみると、弁護士業務との相乗効果が生じてくることが多いと思います。

会社員の場合も、中年以降にな

ると「もう一人の自分」を持っている人の方がイキイキと仕事をしています。定年後も困りません。「会社員」「弁護士」といった一つの役割に自分のすべてを投入するのは少し無理があるような気がします。

—— **大学では司法試験も勉強されていたとか。**

大学は法学部だったので、卒業を1年延ばしたところまで試験勉強をしていました。当時住んでいた実家の近くに元親分さんが住んでいて、「いきなり弁護士になったらあかんで。まず検事になってから弁護士になるんや」と言われていました(笑)。

—— **司法試験に受かっていたら検事になっていましたか？**

組織でやっていくより自分で何かやりたいという気持ちは学生当時からあったので、最終的には弁護士になっていたでしょうね。でもそもそも試験に受かっていないのですからどうしようもありません。

—— **生まれ育った神戸・新開地がとても好きだとか。**

新開地は昔からの繁華街で、商店主、職人さんなど個人で仕事をしていた人たちが多かった。小学校当時の友人も「酒屋の〇〇くん」、「眼鏡屋の〇〇ちゃん」ばかりで、会社員や公務員の子どもはいませんでした。ちなみに私の実家は薬局でした。

だから会社に入社した時に、みんながよく働き、支社長の指示を忠実にこなすことに驚きました。私の周りにいたおっちゃん達は、誰の言うことも聞かないような人ば

かりだったからです。

小さい頃は新開地の映画館や神戸松竹座にもよく通っていました。映画評論家だった淀川長治さんも出身地の新開地でいろいろな映画を見たそうです。

今から思うと、周りの人は皆が建前ではなくて本音、総論よりも各論で生きていたような気がします。体調を崩して会社を休職した時は落ち込みましたが、そのときに私の頭に浮かんだのは新開地のおっちゃんたちの「いい顔」なんです。小さい頃と会社員とのギャップがあったから本を書き続けることができていたのかもしれない。

東京、名古屋、大阪、京都と仕事の関係もあっていろいろな街で過ごしましたが、私にとっては地元神戸が一番落ち着きます。街を歩いているだけで嬉しいのです。定年後の過ごし方として地元で過ごす時間を持つのもいいかもしれません。

今年の夏には、神戸新開地に上方落語の定席となる演芸場がオープンする予定です。老後はその演芸場で入場券のもぎりのボランティアでもできればと思っています。

—— **これから挑戦していくことは？**

今年の4月から神戸の大学で教える予定です。どうすれば学生の力量を高めて、社会人になるための応援や支援ができるのか、新たな「もう一人の自分」を探してみたいと思っています。

（インタビュー：阿部秀一郎、
中川みち子、
堀野桂子、
西村久美子
写真撮影：高廣信之）